スラブ研究センターニュース　季刊　2011年 冬 号

SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS No. 124 February 2011

グローバルCOE

◆ GCOE・SRC　2010 年度冬期国際シンポジウム ◆

地域を融かす境界研究：ユーラシアと「愉快」な仲間たち

開催される

報告する D. ニューマン氏（ベン・グリオン大）

12 月 4 日、GCOE 主催による第 2 回冬期国際シンポジウム「地域を融かす境界研究：ユーラシアと『愉快』な仲間たち」が開催されました。シンポジウム自体は一日限りですが、前後に、若手ワークショップ（12 月 3 日）と笹川平和財団助成セミナー「日本のボーダー・世界のまなざし～境界研究ネットワークの立ち上げに向けて」（12 月 6 日、東京）があり、GCOE イベント全体としては長期的なものとなりました。

冬期シンポジウムの第1セッション「グローバル・コミュニティの形成にむけて：中東・欧州・北米の経験」では、国際的な境界研究コミュニティの重鎮達による「境界」概念の理論的な報告がなされました。次に恒例となったランチオン・セミナーを挟み、第 2 セッション「国際社会学との遭遇：難民・移民・マイノリティ」では、GCOE プログラム事業推進員である樽本英樹氏（北大、文学研究科）が組織したイギリス在住の研究者達による移民問題に焦点をあてた報告がありました。移民問題は、境界研究の中でも最も活発な分野の一つとなっています。第 3 セッション「政治地理学の視座：バルカン・中央アジア・沖縄」は我が国で軽視されてきた「政治地理学」から見た各境界地域に関するセッションです。特に中央アジアについての報告は、スラブ研究センターと馴染みあることもあり、討論者の宇山智彦氏をはじめ会場から鋭いコメントが出され、白熱した議論が展開されました。なお、沖縄問題を論じた山﨑孝史氏（大阪市立大）は、日本の政治地理学の第一人者です。

シンポジウムの前日におこなわれたプレ・シンポでは、内外の若手境界研究者達による報告が6本並びました。テーマの広がりや手法の多彩さは、境界研究の長所でもあり短所でもあるのですが、シンポジウムに招待した重鎮達がコメントに立つことにより、短所の克服がある程度なされたと考えています。いずれにせよ、個別テーマの報告と同時に理論的なセッションを並行しておこなうことが、今後も不可欠であると思われます

「日本のボーダー・世界のまなざし～境界研究ネットワークの立ち上げに向けて」は第一部では「国境フォーラム」に関連した日本の境界地域の問題について国内研究者および関連自治体関係者による報告がなされ、第二部では、冬期シンポジウムで招待した研究者が、自分の事例から境界をめぐる係争と管理を紹介しました。会場には、公館関係者やシンクタンクからの研究者が多く集まり、全般を通じて境界と国家安全保障とを関連付けた質問が多く出されました。

なお、札幌の冬期シンポジウムと東京でのセミナーは、ともに日英同時通訳が設けられ、一般にも広く開放されました。[藤森]

◆　境界から考える多言語・多文化世界　◆
GCOE 研究会「多言語社会ヴォイヴォディナ：交錯する境界・文化・アイデンティティ１」に参加して

旧ユーゴスラヴィアは多民族国家として知られていましたが、少数民族を多く抱えるセルビアは、特に多くの民族問題を孕んでいます。セルビアの民族問題というとコソヴォの紛争や独立問題などが多々言及されますが、北部のヴォイヴォディナ地方も、セルビアの民族問題を理解する上で等しく重要です。

ヴォイヴォディナ地方の面積は、約21,500平方キロメートル（関東地方の2/3ほど）で、およそ200万人（札幌市と大体同じ）が居住しています。セルビア人が人口の6割以上を占めていますが、その他の民族構成はかなり複雑で、それはこれだけの面積、人口に対し、6つの公式言語（セルビア語、クロアチア語、ハンガリー語、スロヴァキア語、ルーマニア語、ルシン語）が設定されていることからも明らかでしょう。尚、公式言語は上記の6言語ですが、バナト・ブルガリア語のようなに地域レベルで公式化が進みつつある言語も存在します。そして非公式な言語まで含めると約30になるとも言われています。

これらの民族はさまざまな意味における「境界」と関わって暮らしています。それは国境を越えた民族的母国との関係、共存する他民族との精神的あるいは文化的境界など極めて多様です。この研究会では、この「境界」からヴォイヴォディナ地方が持つ、多言語・多文化性について明らかにしていくことを目標としているものであり、今回はその第１回目の研究会でした。

研究会第１部では、リュドミラ・ポポヴィッチ教授（セルビア、ベオグラード大学）による「セルビアのルシン人とウクライナ人：いかに彼らがお互いに編みこまれているか」と題された報告がおこなわれました。

ルシン研究の重要な側面の１つとして、あらゆる意味でウクライナとの関係が挙げられます。すなわち「国境を越えた母国」とその歴史や文化を巡る諸問題です。ポポヴィッチ報告ではルシン人とウクライナ人の歴史や、彼らの民族名称の起源についての議論があり、セルビアのルシン人とウクライナ人は、本来同じ少数民族 (national minority) なのだが、オーストリア＝ハンガリー時代から政策によって分断されてきたと結論づけられました。またミクロ言語としてのルシン語とルシン文学は、引き続き発展し、同時にウクライナ語は少数言語としてだけでなく一国家の言語として重要性を拡大すると予測されていました。中でも興

味深かったのはルシン人文法学者ハヴリイル・コステリニクの著作の詳しい分析です。ポポヴィッチ氏はコステリニクの議論を土台とし、ウクライナ語、ポーランド語、スロヴァキア語やセルビア語がルシン語へ与えた影響についての言語学的分析を紹介しながら、ウクライナ語とルシン語の起源に関わる議論は、もはや過去のものであるとも批評していました。

興味深いことに、この講演では“Ruthenian”という語が一貫して用いられていました。これは、ポポヴィッチ氏が明らかに「ウクライナ人＝ルシン人」という立場を取っていることと深く関わっていると思います。“Ruthenian”がどの人々、またはどの言語を指すのか、「ルシン人」と「ルテニア人」としばしば使い分けられることを考えると、若干違和感があったものの、狭い意味に限定しないよう”Ruthenian”を選んだのではないかという印象を受けました。また、18世紀中盤までは、民族籍よりも「どこから来たのか」という事実が重要だったという指摘を興味深く感じました。ルシン人自身の認識によって「どこから来たか」ということも左右される可能性があるとすれば、人文地理学的なアプローチも可能であるように思いました。

日本ではあまり知られていないヴォイヴォディナのルシン人の言語問題を考える上で大変意義深い報告でしたが、必ずしも歴史的な起源や言語的な同一性が「民族」を決定するものではないことにも注意しなければならないでしょう。現地人の自己規定もその大きなファクターです。例えば、ブルガリアとギリシャの国境周辺に住むイスラム教徒の「ポマク人」は、歴史的にも言語的にもスラヴ系のブルガリア人ですが、自身は宗教的側面から「トルコ人」と規定する傾向があります。また、歴史的に連続しているブルガリアとマケドニアの言語問題（これは今年6月のリントステット先生の講演テーマでした）も、幾分ルシン問題に比せられる要素もあるように思われました。

左上：野町、左下：Miroslav Dudok 教授、右上：Ljudmila Popovic 教授、右下：Jana Dudkova 研究員

第2部では、ミロスラフ・ドゥドク教授（セルビア、ノヴィサド大学 / スロヴァキア、コメニウス大学）による報告「スロヴァキア語における内的・外的境界：民族言語、ディアスポラ言語としてのスロヴァキア語」がおこなわれました。ドゥドク氏は、自身がヴォイヴォディナのスロヴァキア人マイノリティーであり、同時に作家でもあります。この報告では、スロヴァキア語の言語的特徴を概説した上で、言語を細分化する境界線には内部のものと外部のものがあるものの、スロヴァキア語の場合は260万人のスロヴァキア語話者がスロヴァキア国外に存在しており、スロヴァキア語の境界線は国家の領域を超えていることが詳細に説明されました。したがって、スロヴァキア国外にも方言が存在し、例えばヴォイヴォディナのスロヴァキア語はスロヴァキア本国の標準語と同等の地位を持ち得るのかということが疑問に思われました。

この報告で興味深かった点の一つは、スロヴァキア語が「対抗する」相手が変化してきているという指摘でした。従来はチェコ語との区別がスロヴァキア語をスロヴァキア語たらしめることと直接的に関わってきましたが、現在ではスロヴァキア語に英語の語彙が大量に入ってくることが問題になっているのだということでした。

ドゥドク氏の研究報告は、単なる研究報告だけではなく、現地人研究者による現状紹介の意味合いも大きかったと思います。尚、余談になりますが、ご自身がスロヴァキア語作家でもあるので、ご自分の作品をどのように規定するか伺ったところ、「私はスロヴァキア語で作品を書くが、自分はむしろ『ヴォイヴォディナの作家』という位置づけをしている。作品はスロヴァキア文学でもあるが『ヴォイヴォディナ文学』」とも考えている」と言っておられました。ヴォイヴォディナのスロヴァキア人マイノリティーは、移住以後 200 年以上もそのアイデンティティを保ち続けている「優等生」として知られていますが、やはりそのアイデンティティは時間と共に変容し、そこには何らかの「境界」が生まれているのではないかと感じられました。

第 3 部では、ヤロスラフ・ヴォイテク監督による映画「国境」（2007 年）が上映されました。この映画はヴォイヴォディナを扱うものではありませんが、中・東欧の国境問題とヴォイヴォディナとも関連する諸民族（ハンガリー人、スロヴァキア人、ウクライナ人）の多様性を理解するうえで、興味深いものでありました。

この映画は、分断された家族や土地を観察することによって国境での生活を描き出すドキュメンタリーです。舞台となるスレメンツェというザカルパッチャ地方の村は、1944 年 11 月にソ連軍が進入したことに端を発し、ソ連とチェコ・スロヴァキアに分断されました。この村の属する国家は今日スロヴァキアとウクライナとなっていますが、住民のほとんどがハンガリー人であるということが興味深く感じられました。

封鎖された国境を挟んで住民たちが会話する様子や、国境の反対側に住む両親を持つ花嫁の再現映像など、印象深い数々の場面とならんで、映画の前半では村の住民が国境警備兵にタバコを渡す光景が紹介されていました。その後スレメンツェが EU の境界になったことで、それまでの動きから逆流するかのように警備が厳しくなると、前半の場面との対比がシェンゲン協定による様変わりを効果的に印象づけていました。シェンゲン協定が国境を消滅させる可能性についてはよく議論されますが、シェンゲン協定が逆に国境を強化する場合もあるのだと気づかされた場面でした。

この映画の後、ヤナ・ドゥトコヴァー講師（スロヴァキア科学アカデミー演劇・映像芸術研究所）による作品解説がおこなわれました。ヴォイテク監督は「90 年代世代」と呼ばれるスロヴァキアのドキュメンタリー映画監督の世代に属し、この世代の特徴はドキュメンタリー映画とフィクション映画を混合することだといいます。この映画でも、現地人だけではなく現地人役の俳優が起用されており、地元のハンガリー語ではなく、標準語のハンガリー語を話していたことが指摘されていたのも興味深かったのですが、同時にこの映画が真に問うものが何なのかということも考えさせられました。

ヴォイヴォディナの多民族・多言語・多文化をめぐる諸問題は、研究可能性の宝庫で、「境界」はその理解に有効な切り口です。そしてヴォイヴォディナ研究は旧ユーゴスラヴィア、ルーマニア、ハンガリー、スロヴァキアなどの地域研究者の共同研究が最も効果的に、かつ意義深くおこなわれる地域の 1 つでしょう。今回は外国人報告者中心でありましたが、今後は様々な背景を持った日本人研究者の積極的な参加と意見交換が望まれます。今後も GCOE の研究会の一つとして継続されるとのことなので、次回以降も今回に劣らぬ充実した研究会が期待されます。［西原周子（北大文学部・院 M1）・野町］

新学術領域研究

◆　第 4 回国際シンポジウム開かれる　◆

初日セッションの様子

12 月 11、12 日の 2 日間にわたり、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 4 回国際シンポジウムが大阪ブリーゼプラザで開催されました。本シンポジウムは、計画研究「国家の輪郭と越境」を進めている社会班（第 5 班）が中心となって企画されたものです。

全体のテーマは「回帰と拡散～地域大国における人間の移動と越境」で、地域大国の周縁的存在であるマイノリティ、移民、あるいは周辺諸国などの視点から地域大国性を照射することを目的としています。

第 1 セッション「聖地巡礼：信仰と消費」では高山陽子氏（亜細亜大学）が現代中国における革命関連の事物を記念した土産品をもとに、「大国」中国の現代史がいかに正当化され、消費につながっているかについて、多くの映像資料とともに紹介しました。またアイリーン・ケイン氏（コネチカット・カレッジ）は、20 世紀初めの非イスラーム国家ロシアによるムスリム巡礼の支援の実態について、貴重な広告資料などをもとにした報告をおこない、ロシアが少数派のムスリムといかに関わり合い、大国に取り込んだかについて紹介しました。小磯千尋氏（大阪大学）は、西インド・マハーラシュートラ州プネー市郊外のヒンドゥー聖地における巡礼のフィールド調査に基づき、同地で特徴的なガネーシャ信仰を通じて、マハーラーシュートラ的な意識がいかに生産されているかを紹介しました。

第 2 セッション「故郷を遠くで想う：ディアスポラへの招待」では、グルナラ・メンディクロヴァ氏（世界カザフ協会ディアスポラ研究センター）がカザフ人移民の世界的な分布状況を紹介し、またスラット・ホラチャイクル氏（チュラロンコーン大学）が、自身の経験を踏まえて、タイにおけるインド系移民の社会経済的な状況を報告しました。また劉宏氏（南洋理工大学）は、1950 年代以降の華僑について歴史的に考察した後、「新移民」と呼ばれる華僑が「回国服務」を掲げて、母国への奉仕のために回帰する現象を紹介しました。

第 3 セッション「モバイル・ビジネスマン：商業ディアスポラとネットワーク」では、アルツヴィ・バフチニアン氏（アルメニア科学アカデミー歴史学研究所）が、アルメニア系商人のネットワークについて、歴史的な流れとともにアルメニア人としての自己認識の形成過程について紹介しました。スティーヴン･デイル氏（オハイオ州立大学）は、サファーヴィー朝など西アジア地域への広がりと、東南アジアへの広がりの 2 つの事例に基づき、南アジア系商人のネットワークについて歴史的に考察しました。久末亮一氏（政策研究大学院大学）は、シンガポールにおける中国系華人社会の本国との結びつきを、特に金融業などの実態をもとに豊富なデータを使って報告しました。

2 日目のスペシャル・セッション「知識の拡散：エリート養成と国家の輪郭形成」では、

王智新氏（聖トマス大学）が、中国における科挙制度や同制度廃止後の官僚層の形成について、歴史的経緯とともにその現状や課題を紹介しました。またジョーティ・ダンデーカル氏（バーラティ・ヴィディアーピート大学）の報告では、インドの教育事情が概観されるとともに、インドに留学する学生の増加する傾向にある状況が、興味深い写真などとともに紹介されました。ラフィク・ムハメトシン氏（ロシア・イスラーム大学）は、ロシアにおけるムスリム知識人層の形成におけるイスラーム教育の現状と課題について、異なる宗教が混在するロシア的風土で、中東のイスラーム教育との間に生まれる違和感などについて報告をおこないました。

第 4 セッション「周縁からの問いかけ」では、マイケル・レイノルズ氏（プリンストン大学）が、20 世紀初めのクルド人コミュニティがオスマン帝国といかなる緊張関係にあったかについて報告しました。登利谷正人氏（上智大学）は、19 世紀末のアフガニスタンがロシアと英領インドの確執の中でいかに苦悩したかを、歴史的に考察しました。続いてウラディン・ブラグ氏は、20 世紀半ばの中国における人間の政治的な移動を通して、建国間もない中国における中国共産党の政策を紹介しました。

第 5 セッション「移動がもたらすもの」では、ジェシカ・アリーナ＝ピサノ氏とアンドレ・シモニ氏（オタワ大学）が、ネット回線によるオタワからの参加で、ヨーロッパとウクライナ、ロシアと中国の国境を比較しつつ、国境をまたぐ人々の状況を貴重な写真とともに紹介しました。中谷純江氏（鹿児島大学）は、インドのマールワリー商人が築く建造物や都市について、彼ら独自のコミュニティのあり方を考察しました。崔延虎氏（新疆師範大学）は、新疆における遊牧民が中国という枠組みの中で自らの移動範囲をいかに変容させているかについて報告しました。

シンポジウムには初日 75 名、2 日目 65 名が参加しました。いずれの報告も刺激的で、地域大国像を異なるアプローチによって検討することができました。また、分野や地域の異なる報告は、地域大国の輪郭形成を比較研究する上で、その視点を広げる有意義なものでした。

シンポジウム運営に当たり、越野剛氏（センター助教）、藤森信吉氏（GCOE 特任研究員）、任哲氏（2 班プロジェクト研究員）、池直美氏（GCOE 特任助教）のご助力に感謝を申し上げます。［山根］

編集部注：このシンポジウムは、スラブ研究センター冬期国際シンポジウムも兼ねて開催されました。

シンポジウム参加者の顔ぶれ

◆　『比較地域大国論集』第 4 号、5 号の刊行　◆

2010 年 7 月 10 日にスラブ研究センターで開催された、新学術領域研究第 3 回全体集会の記録として、『比較地域大国論集』第 4 号「比較研究の射程：これまでの研究の集約と今後の方向性」が刊行されました。これは、本領域研究に対する中間評価を意識して、各班の研

究代表者がおこなった報告と、二名の討論者によるコメントや議論の模様をまとめたものです。

さらに引き続いて、『比較地域大国論集』第5号 “Sorokiniada: Eurasia Talks about Sorokin” が刊行されました。この号には、2010年7月末にストックホルムで開かれたICCEES（国際中東欧研究学会）世界大会の “Sorokiniada” セッションで報告された内容が収録されています。ボリス・ラーニン氏（ロシア教育アカデミー）と望月哲男氏（スラブ研究センター）の共同編集で、ロシア語と英語の論文集となっています。

いずれも全内容を本領域研究のホームページからダウンロードすることができます。[後藤]

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/publications/no04/contents.html
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/publications/no05/contents.html

研究の最前線

◆ 2011年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関する公募結果 ◆

12月3日の拠点運営委員会において、2011年度「スラブ・ユーラシア（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関するプロジェクト型共同研究および共同利用型個人研究に関する応募者を審査した結果、次の方々にお願いすることに決定いたしました。それぞれの研究が良き成果を生むことを、心から期待いたします。

なお、この企画については、次のサイトをご参照ください。[望月]

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/bosyu/20100928.html

2011年度採択者一覧

1. プロジェクト型

申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
塩原　俊彦	高知大学人文学部・准教授	ガスプロムからみたロシアの政治経済分析
等々力政彦	トゥバ民族音楽家	ロシア連邦・トゥバ共和国および台湾に保存されているトゥバ古地図のデータ化に向けての基礎調査
横手　慎二	慶應義塾大学法学部・教授	北東アジア地域における第一次世界大戦

2. 共同利用型

申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
大串　　敦	早稲田大学政治経済学術院・助教	現代ロシア官僚制の特質と構造の分析
木寺　律子	同志社大学、大阪市立大学・非常勤講師	ドストエフスキー文学におけるシラーの影響
杉戸　勇気	東京大学大学院総合文化研究科・博士課程	ビロード革命を軸としたチェコ文学・文化研究
田中　良英	拓殖大学海外事情研究所・客員研究員／敬愛大学、共立女子大学、日本大学他・非常勤講師	18世紀ロシア陸軍における非エリート連隊の日常史
日臺　健雄	一橋大学経済研究所・研究機関研究員	グローバリゼーション下のロシア農業：WTO加盟問題と農産物貿易の動向

前田　　恵	大阪大学、同志社大学・非常勤講師	映画スタジオ ЭTK の運営と成果
三好　俊介	電気通信大学他・非常勤講師	ヴラジスラフ・ホダセヴィチとその周辺
村知　稔三	青山学院女子短期大学子ども学科・教授	現代ロシア社会の変遷とその下での子ども特に乳幼児の現状に関する研究

◆　ロシア･東欧･ユーラシア研究所（ソウル国立大）＆スラブ研究センター（北大）　◆ ジョイントシンポ分科会

テーマ：　The Changeable and the Unchangeable in the Studies of Russian Language and Literature（ロシア語ロシア文学研究における可変的要素と不変的要素）

オープニング・セレモニーでは学生による舞踏パフォーマンスも

11 月 26 日（金）13 時から 18 時まで、スラブ研究センター 4 階大会議室で、上記の合同研究会がおこなわれました。出席者はソウル大学ロシア･東欧･ユーラシア研究所のゲスト 7 名、スラブ研究センターの教員･外国人研究員・大学院生など 10 名、学外外国人ゲスト 2 名。

スラブ研究センターはソウル大･北大のジョイントシンポジウムの枠で過去 4 回合同企画に参加していますが、今回は上記の研究所との連続ジョイントプログラムの第 3 年目になります。ソウル大学の上記研究所は学際的な組織ですが、人文系研究者が相対的に多いため、言語･文学をテーマにした今回は、所長と次期所長を含む 7 人の大きな代表団が参加しました。

企画の趣旨は、主として 20 世紀のロシア文学･言語の研究史を踏まえて、モダニズム以降の文化における不変的なものと可変的なものを論じようというもの。パク・ジョンソウ（教授･所長）「トルストイとソロヴィヨフの論争」、チョイ・ジンセク（上級研究員）「現代のバフチン研究と文化のダイナミクスの問題」、ソン・ヨンジ（教授）「ロシア語における原因の接続詞」など、6 件の興味深い報告がなされました。司会･コメンテーターはスラブ研究センターのスタッフのほか、ロシア科学アカデミーロシア文学研究所（サンクトペテルブルグ）からの外国人研究員マリヤ・マリコヴァさん、文学研究者のエドワルド･ヴラーソフ博士（有限会社フロントインタレスト（札幌）副社長）がつとめました。

ロシア語と英語でロシア文化を語り合いながら、お互いの関心や認識の幅を確かめ合う、きわめて有意義な午後となりました。プログラムは以下の通り。［望月］

13:10-14:30 **Session 1: «Literature I».** Chairperson: Mochizuki Tetsuo (SRC)

1. Park Jong So (Prof. SNU)
   The Controversy between L. Tolstoy and V. Solov'ev
2. Cha Jhee Won (Senior Researcher, SNU)
   Valery Brjusov's Esthetic Position in the Context of Symbolist Lifecreation

Discussant: Maria Malikova (Institute of Russian Literature, RAS)

14:45-16:05 **Session 2: «Literature II».** Chairperson: Yi Seon Bok (Prof., IREEES of SNU)
1. Lee Ji Yeon (Senior Researcher, SNU & Prof. of Han Yang Univ.)
Monument and "Literaturocracy": The Aesthetics of Power in 20-th Century Russian Literature
2. Choi Jin Seok (Senior Researcher, SNU)
Bakhtin Studies Today and the Problems of Cultural Dynamics
Discussant: Koshino Go (SRC)

16:20-17-40 **Session 3: «Linguistics».** Chairperson: Nomachi Motoki (SRC)
1. Song Eun Ji (Prof. SNU)
Causal Connectives in Russian
2. Dong Young Eun (Graduate Student of SNU)
Cognitive Semantics of the Russian Dative
Discussant: Eduard Vlasov (Ph.D., Vice-President of the Frontinterrest Co., Ltd, Sapporo)

◆ ITP の総括としての国際若手ワークショップ始まる ◆

ITP も余すところ 2 年間となりました。この事業を総括し、次の段階への飛躍を作るために、派遣経験者が自ら組織者となってセミナーを組織する試みが始まりました。最初にこの役割を果たしてくれたのは、第 2 期 ITP フェローとしてオックスフォード大学に派遣された溝上宏美さんです。彼女によって、新学術領域の国際シンポジウム「回帰と拡散：地域大国における人間の移動と越境」の前日（12 月 10 日）、同じ大阪ブリーゼプラザで第 1 回国際若手シンポジウム「帝国としての過去と移民：日ロ英の国際比較」が開催されました。その内容は以下の通りです。

14:10-15:20 セッション 1 ユーラシア内の移動：ロシアとソ連、帝国の陰影
ペーパー：Jeff Sahadeo（カールトン大学、カナダ）「最初の遭遇：戦後のレニングラードとモスクワにおける非ロシア系『有色人』」
Sebastien Peyrouse（中央アジア・コーカサス研究所、フランス、ジョン・ホプキンズ大学）「中央アジアからのロシア系住民の帰国問題：移住の流れと反ロシア感情の問題」
討論者： Gulnara Mendikulova（世界カザフ協会ディアスポラ研究センター、カザフスタン）

15:40-16:50 セッション 2 海を越えた移動：日本帝国とイギリス帝国における事例
ペーパー：David Rands（フロストバーグ州立大学、米国）「日本におけるコリアン：植民地から帝国の中心へ」
溝上宏美（京都大学）「帝国からコモンウェルスへ：ポーランド亡命軍兵士の受け入れをめぐるイギリス政府の対応」
討論者： Eileen Kane（コネティカット・カレッジ、米国）
両セッションとも司会は、長縄宣博（センター）でした。

溝上さんは 2010 年 1 月に派遣先で国際セミナーを組織した際にも、組織者としての裁量で報告者候補に声をかけるだけではなく、Call for Papers をインターネット上で発表して報告者を募るという積極的な方法をとっています。今回の企画においても 3 人の外国人報告者のうち 2 人は、公募による報告者でした。シンポジウムを組織しての溝上さんの感想は、ITP のホームページ＜ http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/itp-hp/report/report014.html ＞に掲載されています。［松里］

◆ 2011 年度鈴川・中村基金奨励研究員募集 ◆

鈴川・中村基金の奨励研究員制度を利用して、これまでに多くの大学院生がスラブ研究セ

ンターに滞在し、センターおよび北大附属図書館の文献資料の利用、センターで開催されるシンポジウム・研究会への参加、センターのスタッフとの意見交換をおこない、実りのある成果を挙げてきました。

2011 年度も昨年同様に募集をおこなう予定です。募集人数は数名とし、助成対象者は原則として博士後期課程以上の大学院生です。助成期間は 1 週間以上 3 週間以内です。滞在期間は、センターの行事をご勘案の上、決めていただければと思います。最終的な日程の調整は、ホスト教員とおこなうことになります。行事につきましては、以下をご参照ください。

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/index.html

募集の開始は 2 月中旬頃、締め切りは 4 月末を予定しています。募集要項・応募用紙をご希望の方はセンターまでご連絡ください。なお、募集要項・応募用紙はセンターのホームページでも参照およびダウンロードできます。［長縄］

◆　専任研究員セミナー　◆

ニュース前号以降、専任セミナーが以下のように開催されました。

2011 年 1 月 20 日：**田畑伸一郎** “Comparison of the Mechanisms of the Increase in International Reserves in Russia, China and India”
センター外コメンテータ：梶谷懐氏（神戸大学大学院経済学研究科）

今回の田畑論文は，新学術領域研究「比較地域大国論」の今年度における研究成果であり、ロシア、中国、インドの経済比較が主要な論点でした。具体的には、田畑論文はこの三国の経済面における共通性が外貨準備の増大にあることに着目し、その増加のメカニズムが比較検討されました。コメンテータには、中国経済の専門家で、人民元のレート問題やそれに関係するグローバル・インバランスについても研究をおこなっている梶谷氏をお招きしました。

討論では三国における自国通貨安の維持と外貨準備の増加がもたらす「再生ブレトンウッズ体制」について活発な質問や意見が出され、そのような体制として捉えることの是非やその持続可能性などをめぐって多面的な議論がおこなわれました。

スラブ研究センターが中心となっておこなっている「比較地域大国論」も最終的な取りまとめの段階に入り、今後は今回の田畑論文のような全体を俯瞰する研究が次々と発表されることが期待されます。［家田］

◆　研究会活動　◆

ニュース 123 号以降の、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE 研究会、世界文学研究会、北海道中央ユーラシア研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。［大須賀］

11 月 25 日　**桜間瑛**（北大・院）「2010 年全露国勢調査現地報告：タタルスタン共和国の民族問題との関連から」（昼食懇談会）
12 月　2 日　**塚田力**（北大・院）「ベロクリニツキー派信徒の自伝に見る内戦期の従軍体験」（第 3 回古儀式派研究会）
12 月　8 日　**宮本万理**（センター）「現代ブータンの自画像」（GCOE・SRC ボーダースタディーズ・セミナー）
12 月 15 日　**A. アブラム・レイトブラト**（ロシア国立芸術図書館、『新文学時評 NLO』誌）「伝記のナラティブ構築：異端の作家ファデイ・ブルガーリンを中心に」（新学術特別セミナー）
12 月 18 日　**T. ヒルマン**（北海道日本ハムファイターズ元監督、米国）「体験的スポーツ国境学：ヒルマン元監督の日米野球ウォッチ！（GCOE 特別セミナー）
12 月 20 日　**安達大輔**（学術振興会特別研究員）「モダニズムする／しないゴーゴリ：視覚と運動をめぐる 3 つのエピソード（オペラ、映画、フォルマリズム）」（GCOE-SRC 研究員セミナー）

12 月 22 日　**野村まり子**（北大・院）「ラフィク・シャミ概観」（世界文学研究会）
1 月 11 日　**平山陽洋**（センター）「ベトナムにおける戦争と独立：第一次インドシナ戦争の経験」（GCOE・SRC ボーダースタディーズ・セミナー）
1 月 12 日　**P. ガトレル**（マンチェスター大、英国）“World Refugee Year, 1959-1960 and the History of Population Displacement”（GCOE-SRC 特別セミナー）
1 月 14 日　**竹村寧乃**（北大・院）「ザカフカス連邦創設の是非をめぐる議論：1921 年現地新聞の反対意見を中心に」（北海道中央ユーラシア研究会）
1 月 17 日　**M. ヴィソコフ**（SRC）「アントン・チェーホフ『サハリン島』のコメンタリーについての諸問題（センターセミナー）
1 月 24 日　**井澗裕**（GCOE 研究員）「シュムシュ島　1945 年 8 月」（GCOE-SRC 研究員セミナー）
1 月 29 日　**富樫耕介**（東京大・院）「チェチェン・マスハドフ政権の『外交』政策（1997-99）：戦後平和構築と『未（非）承認国家』を巡る問題；**M. ウラコワ**（同）「『二度目の革命』前・中・後のキルギス」（北海道中央ユーラシア研究会）
1 月 31 日　**秋月準也**（北大・院）「ブルガーコフ文学における『家（дом）』と『家でないもの（антидом）』」（世界文学研究会）

マイクロフィルムで見た軍人の口髭

アレクサンダー・モリソン（リヴァプール大学歴史学部／センター 2010 年度特任准教授）

ザラフシャン地方征服時、武勲を挙げた A. K. アブラモフ将軍（1836–86）、『トルキスタン・アルバム』から

資金申請や研究計画書のことになると、私は初心者同然だ。私が博士号を取得したオックスフォード大学のコレッジは、ほとんど欠点といえるくらい資金面で寛大で、文書館調査の旅行に資金が必要なときはいつも、なぜタシュケントで 2 ヵ月間ほど過ごさなければならないかについて、いくつか漠然とした理由を述べて会計係に請求するだけでよかったのである。オックスフォードでの 7 年間を経て、徹底的に怠けて甘やかされてしまっていた私は、人文科学の研究で資金を見いだすことが通常どれほど難しいかについて、想像だにしていなかった。リヴァプール大学へ 2007 年に移ってからは、年間の研究費が 400 ポンドとなることを告げられ（それでも英国の大学の基準では十分気前が良いほうなのだが）、私は衝撃とともに現実の世界に引き下ろされた。イギリスの芸術・人文科学研究評議会と、その際限なく煩雑な申請書、詳細な予算計上の要求や醜悪な官僚的専門用語との初期的な小ぜり合いは、説得力のある研究計画書を書きあげる能力が、良い論文を書き採択されることと同じくらい高く評価されうるという、競争的資金申請の醜く非情な新世界へと私を導いた。楽しみにしていた 2010 ～ 11 年の研究休暇をどう過ごすのが最善かについて考え始めたときまでには、私は苦しめられつつもより賢明になっていた。

札幌に行くことはほとんど瞬時に思いついた。スラブ研究センターの出版物は、博士論文を書いていた際にインターネット上で最初に偶然見つけたときからずっと、私の研究にとって常に存在感のあるものであった。帝国としてのロシアについてイギリスでほとんど誰も書いていなかった頃に、日本では長年にわたって研究者たちが、私が書くことを熱望してきた類いの非ロシア人地域の詳細なローカル・ヒストリーを公刊していたことを、私は嬉しくも

発見した。中央アジア関連のメーリングリストで定期的に回ってくるセンターの会議やセミナーのプログラムは、私の羨望の的であった。宇山教授からの驚くほど気前よい招待により（それはイギリスの地方大学で働く多くの若手講師には想像できない種類のものであった）、2009年に私は実際にセンターを初訪問し講演していた。私は札幌に戻りたいと思っており、外国人研究員の申請様式はその思いを確実なものにした。それは単純明快かつ知的に筋が通っており、書き込むのに30分程度で済んだ。7週間後、アルマトゥのインターネット・カフェで、私は申請が採択されたことを知った。英国の助成金申請にかかる学術的努力対資金的見返り（50対1のようなものだろうか）のいつもの比率は、ほとんど完全に逆転されていたのである。私は、単に4ヵ月半の間、刺激的な知的環境と、素晴らしい図書館へのアクセス、そして美しい魅力的な国を発見する機会を与えられただけではなかった。リヴァプール大学歴史学部は、喜びのあまり、すぐさま私にもう半年余りを研究休暇として与えたのであった。

『軍事集成』の表紙

私が提案した研究主題とは、「ロシアの官僚の思考における中央アジア征服」であった。申請から札幌への到着までの1年間に亘り、私は日本で作業をするのに十分な資料をモスクワとアルマトゥの文書館から得るため、休暇からできるかぎり時間を捻り出した。私はロシア国立軍事史文書館（RGVIA）、ロシア帝国外交政策文書館（AVPRI）とカザフスタン中央国家文書館（TsGA RK）からの抜き書きで膨らんだ綴じファイルと、後者で撮影した写真で埋めつくされたノートパソコン（彼らの驚異的に寛大な無料の写真撮影方針が末長く続かんことを！）を携えて札幌に到着した。これが、日本での修道院的に静かな私の仕事場での隔離生活において、作業する資料の大部分になるだろうと想定していたのだが、図書館でマイクロフィルム・カタログに短時間目を通しただけで、私は考えを改めた。『トルキスタン報知 *Turkestanskiya vedomosti*』25年分、『軍事集成 *Voennyi sbornik*』完全版、ベフブーディー編集の雑誌『アーイナ』、そのうえ『トルキスタン集成 *Turkestanskii sbornik*』の完全な電子版といった、英国図書館とオックスフォード大学ボードリアン図書館のいずれにも所蔵がない宝物があったのだ。私は閲覧者の鼻と耳を焼き焦がすよう特別に設計されたかのように思われるロシアの文書館閲覧室の古色蒼然とした東ドイツ式のものとはかけ離れた、コンピュータ化された最新式マイクロフィルム・リーダーで作業をするために、兎内准教授と彼のアシスタントたちから忍耐強い手引きをうけ、『軍事集成』のリールを回しながら毎朝愉快に過ごした。そして、非対称的な植民地戦争の典型的事例における自らの役割に関して、征服が終わるよりずっと前に書き始めたかに見えるほど常軌を逸した性急さをもって回想を著したイヴァーニン、グロデコフ、クロパトキン、アンネンコフといった、顎鬚と口髭を豊かに蓄えたトルキスタンの将軍たちによる大量の記事を、ここではロシアとは違って淀みなくスキャンしハードディスクに保存することができた。

もう1つの発見が、私が滞在を始めておよそ1ヵ月後にあった。そのとき、私は『クリティカ *Kritika*』誌への再提出に向けて修正していた論文に基づき、「ロシア帝国の中央と植民地における帝国的シティズンシップ」について院生向けの講義を行ったのだった。このような主題について（それぞれ宇山、松里、長縄の教授陣が代表する）ステップ、西部国境地域、ヴォルガ＝ウラル地域の専門家と、問題を熟知した院生聴衆とともに議論することができたことは、この上なく有益であった。カザンとオレンブルグの両県に適用された法規の違いや、ステップ総督府における軍事支配の変化しやすい性格について啓発をうけた私は、図書館を訪

れ、そこでの短時間の検索によって、ロシア帝国の法律と行政制度における地域間の相違に関する2棚分の本を発見した（おそらく松里教授のこの分野における長年の研究によって集められたのであろう）。論文は1週間後に大幅に書き直され、1ヵ月後に採択された。

最後に、日本各地の大学から多くの主導的な研究者が参加する研究プロジェクト「ユーラシア地域大国の比較研究」に、比較帝国史（特にインドにおけるイギリスと中央アジアにおけるロシアの比較）という私の研究関心がいかに深く結び付くものであるかを、私は理解するようになった。「グレート・ゲーム」の単調な常套句を避けたいと望んでいた私は、元来、同時期に並行した南アジアでのイギリス権力拡大をあまり考慮せずに、ロシアによる征服事業についての研究をかなり一面的に構想していた。しかし、征服を比較の視座から捉えたペーパーを書くようにという宇山教授の依頼のおかげで、私は、露英両国が1839年に行った中央アジアへの進軍、すなわちそれぞれ無惨にも失敗したヒヴァとアフガニスタンへの侵略の対称性を考察するに至った。これらの2つの事例を並べて見ることによって、帝国の境界を越えた「官僚の思考」の共通性についてだけではなく、これらヨーロッパの近代的軍隊が現地の輸送手段（何万というラクダ）に共に依存していたことに関して、新たな洞察が得られた。スラブ研究センターは、教育・事務負担からの解放と平穏だけではなく、知的な挑戦と刺激をも与え、私の研究に多大な利益をもたらしたのである。

執筆の生産性についていうと、教育義務からの解放は、英国の大学システムを管理する支配欲の強い人々によって研究者たちに押し付けられた、不可解で陳腐な大学行政からの解放ほど重要ではないと私は思う。もっとも、札幌ではその両方から私は解放されていた。また、大須賀さんは新しい学術環境に落ち着くことに関連した種々の形式的な事務が順調に、かつ最小限の騒ぎをもって完了するように請け合ってくれた。これにより、スラブ研究センターでの滞在期間終了までに、私は2本の論文を修正して採択に漕ぎ着け、ロシアの征服事業に関して本一冊の半分相当の草稿を書き、トルキスタンへの農民の入植に関連した主題で他に2本のペーパーを完成させていた。

私はときには週末を北海道の見事な自然風景を愛でながら過ごす機会も得た。とりわけ支笏湖温泉（おそらく恵庭山を登る前より後に浸かるべきだっただろう）、そして豊平峡の素晴らしい温泉兼カレー店（天才的な香りのする組み合わせ）の、楽しい思い出がある。私は美瑛周辺の田舎をサイクリングで巡り、函館で生イカを食べ、洞爺湖畔で蒸気をあげる火山を畏怖と不安をもって見つめた。東京と京都でもペーパーを発表する機会を得たが、正直なところ、これらの都市が確かにもつ魅力にもかかわらず、札幌にいることを運よく感じたと言うことができる。夏の穏やかな気候、土地が広大で人混みがないこと、大学キャンパスの緑の美しさと、リヴァプールやオックスフォード同様に自転車でどこへでも行けること、これらすべてがこの街の魅力を引き立てる。私は食事にも驚嘆した。魚はイギリスではほとんどありえないほど上質かつ新鮮で、ささやかな秋刀魚でさえ美味であったが、私が一番好きになったのは鰹の刺身である。私はジンギスカン店で羊肉の塊を焼き、お好み焼きをひっくり返し、魅惑的な寿司が回転台の上を通り過ぎる前につかみ取ることにかなり習熟した。私は嬉々として札幌ラーメンをすすり、洗練されたイクラ丼から暖かい癒しのカツカレーまで、大学食堂のメニューの並はずれた種類の多さに驚き続けた。このすべての食い道楽にもかかわらず、私は実際には痩せたのであったが、それが日本の食生活の健全さによるものなのか、それよりも私がイギリスで普段食べているものの不健康さを意味するものなのかは、定かではない。

こうして、スラブ研究センターにおける私の夏は、個人的にも知的な面でも非常に充実したものであった。もしも私が研究者としてのキャリアを選んだことが賢明であったかを問う気持ちになるようなことがあれば、これは私が振り返ることになるだろう夏であった。

（英語から須田将訳、宇山智彦監訳）

知られざる境界のスラヴ語「西ポレシエ語」について

野町素己（センター）

2年前の春、あるNPO団体からスラヴ語に関する小さな記事の執筆依頼があった。朝日新聞のチェルノブイリ関係の記事に出ていた「ポリーシャ語」についての一般向けの解説をして欲しいとのことである。なぜ私にそのような依頼が来たかというと、この件についてその団体から相談を受けたある著名な言語学者のK先生が、私のポーランド滞在の経験をご存知で、ポーリッシュ（ポーランド語）に長けていると言って、執筆者として推薦してくださったからである。

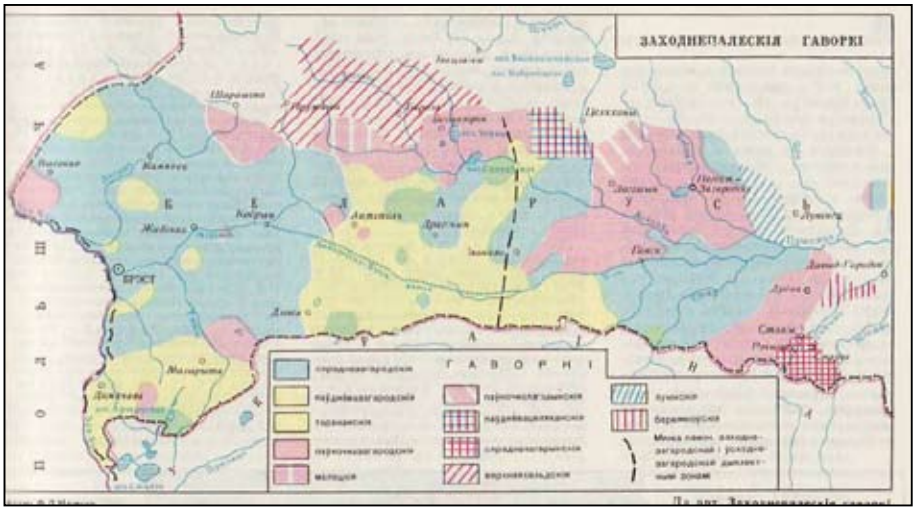
余談だが、このK先生と知り合ったのは、そのさらに数年前、ハンガリー語研究で著名な故・徳永康元先生の蔵書整理に動員されたときである。徳永先生は大変な愛書家で、その書庫には凄まじいものがあった。K先生は徳永先生の愛弟子の1人であったため、その蔵書整理を一手に引き受けておられた。蔵書整理は毎週土曜日と日曜日である。K先生は本棚から研究書を丁寧に取り出し、埃を払って紐で縛る前に、まずマスクを外し、その本の意義やその分野の研究史などを動員された若者たちに説明される。K先生の気さくなお人柄、大変な博識、その上時々スラヴ語関係の本が出てくると「いい本見つけたね。それ、持って帰っていいよ」とおっしゃるので、毎週土日の労働が楽しみであった。

さて、NPO団体とK先生の間でどのようなやり取りがあったのかはわからないが、「ポリーシャ語」という言葉自体が聞き慣れないこともあって、またその言葉がスラヴ系ということで、先方の間でポーランド語と混同されて私に依頼が来たと想像される。いずれにしても、丁度「ポリーシャ語」に関心があって調べていたので、お引き受けすることにした。

「ポリーシャ」とは、北ウクライナと南ベラルーシの国境に沿って細長く広がる地域の名称で、ポーランドの東部も一部含まれている。「ポリーシャ」の語源については諸説あるようだが、もし“po-les-ьje”であれば「森林に沿った土地」という意味である。それに対して「ポーランド」の語源には“pol′e”が入っているので、「平野」と関連しているか、あるいは「平野に住む部族（Polanie）の土地」という意味になるだろうから、いずれにしても「平野」と関係している。したがって、この二つ名前の音は似ているが別物である。ロシア語の発音に基づくと「ポレシエ」、ベラルーシ語風には「パレッセ」と表記するのがよいだろうが、ここではとりあえず「ポレシエ」と書くことにする。

この地域で話される言葉は東スラヴ諸語の方言で、ウクライナ語とベラルーシ語の過渡的方言とされる。過渡的方言であるから、その言語的属性は研究者によって意見が異なる。例えばベラルーシ学の父E.カルスキーの『ベラルーシ方言地図』（1903年）では、ポレシエ地方の大部分は北小ロシア（ウクライナ）方言として扱われており、N.ドルノヴォ、N.ソコロフ、D.ウシャコフによる『欧州部分のロシア語方言地図の試み』（1915年）でも、やはり過渡的な北小ロシア方言として扱われている。特に議論がぶつかるのが西ポレシエ方言であり、現在では、ウクライナの研究者はウクライナ語方言、ベラルーシの学者はベラルーシ語方言とすることが多いようである。

言い方を変えると、この地方の言葉はウクライナ語でもベラルーシ語でもあるし、同時にウクライナ語でもベラルーシ語でもないのである。この意味において、ベラルーシの方言学者P.ブズク著『ベラルーシ言語地理学の試み』(1928年)における次の見解は印象的である。「もし文化的・国家的中心が他の場所に出来れば、それと共に言語間の境界が変わることは明らかである。例えば、南ベラルーシ方言と北ウクライナ方言には少なからぬ共通点があり、もし何らかの理由で政治的、文化的組織の中心がポレシエ地方のどこかに現れていたとしたら、



西ポレシエ方言

ベラルーシ・ウクライナの過渡的方言地域に、新しい『ポレシエ語』が出来た可能性に議論の余地はない。」

このような境界と言語の属性、政治的問題も含んだ新言語の成立をめぐる問題は、スラヴ語世界においては珍しいことではない。例えば、有名なところでは「マケドニア方言」の属性を巡るかつてのセルビアとブルガリアの長年にわたる対立が思い出されるし、オンドラ・ウィソホルスキの「ラフ文語」（スラブ研究センターニュース 120 号の拙文参照）もチェコ語とポーランド語の過渡的方言の問題であった。セルビア・クロアチア語の後継諸言語である、クロアチア語、セルビア語、ボスニア語、モンテネグロ語の諸問題も方言の連続性と境界との問題と密接に関わる。

果たして、ブズクの「予言」はおよそ半世紀後に部分的にではあるが実現したのである。それが「西ポレシエ語」である。西ポレシエ語の活動は、1980 年代言語学者でかつ詩人で、西ポレシエ地方出身のミコラ・シリャホヴィッチ氏（1956 年～）のイニシアティヴの下、数人の仲間たちとともに始まった。シリャホヴィッチ氏は詩作をロシア語やベラルーシ語で行うが、自身の詩的表現が母語ではないこれらの言語では実現しないこと、そしてバルト世界とも繋がっている祖先や、かつての文化的・民族的な特殊性への憧憬にも似た感覚から、独自の言語を持つことの必要性を説いた。そして 1988 年には文化団体「ポレシエ」を結成し、ペレストロイカの流れにのり、西ポレシエ語を中心としつつも、ベラルーシ語やロシア語の記事や文学作品も掲載された新聞を刊行しはじめた。

シリャホヴィッチ氏のプロジェクトには、ベラルーシだけではなくウクライナからの参加者も 20 人ほどいたという。中にはポレシエ地方出身ではないにも関わらず、シリャホヴィッチ氏の言語プロジェクトで詩作を発表するミコラ・チェルニャクのようなジャーナリストもいた。インタビューに応じてくれた当時の参加者の 1 人、ヴィクトル・ダヴィデュク氏によると、ポーランド側のポレシエ人からの参加はなかったそうである。

1990 年には、専門家や活動家を中心とした西ポレシエ語の諸問題と規範化に関するシンポジウムも開催された。このような西ポレシエ語の文語化の試みは、ベラルーシ言語文化からの分離主義であるとして非難されることもあったが、現象として多くのスラヴ語学者の注意を引いた。こういったミクロ文語の大家 A. ドゥリチェンコはもちろんのこと、N. トルストイ、A. スプルン、G. ツィフンといった大御所もこの問題に注目し、議論に参加している。

この運動は 90 年代初めから半ばにかけて停滞し、法的には現在も存続しているが、96 年ごろからは実質的な活動が停止した。その理由はいくつかある。例えば、1）このような小さな地域でもさらに小さな方言差があり、人工的な共通語の創設にそもそも困難があったこと、2）シリャホヴィッチ氏がロシア語、ベラルーシ語と西ポレシエ語を区別する目的で導入された文字システムや造語法が複雑であり、それが生きた方言とかけ離れてしまい、彼以外にはマスターしにくかったこと、3）ポレシエ地方の一部のエリート以外は、西ポレシエ語の印刷物には大きな関心を示さなかったこと、4）シリャホヴィッチ氏は現存しないバルト系のヤトヴャク人をポレシエ人の祖先とみなし、言語名をヤトヴャク語（jітвjежа волода）としたこと、などの理由が挙げられよう。因みに、シリャホヴィッチ氏によると、ポレシエ地方でも聞かれる “jazyk” はロシア語風、“enzyk” はポーランド語風なので、新しい語として「先祖」の言語と類縁関係にあるバルト系ラトビア語の単語 “valoda”「言葉」から voloda という語を造り採用したのだという。

このように「リーダーが飛ばしすぎるとついていけない」という例はシリャホヴィッチだけではない。19 世紀中ごろにカシュブ語を方言から文語に引き上げ規範化しようとしたが一般民衆からは理解されにくかった F. ツェイノワ、21 世紀に入ってからでも「モラヴィア語」を標準化し、その規範にグラゴール文字表記や「独立与格構文」などを取り入れようと考えた、かつての R. スボヴォダらなどが連想される。

では今日、西ポレシエ語とその運動はどうなったのか。インタビューに応じてくれたかつての活動家たちの話では、西ポレシエ語を使う者はもういないとのことだ。当時に懐かしさをこめながら批判する口調で語るのみである。インタビューに応じたベラルーシ語学者のフョードル・クリムチュク氏は「結局西ポレシエ語を使うのはシリャホヴィッチ 1 人きり。彼は『ウィソホルスキ』になってしまった！」と述べる。

シリャホヴィッチ氏はベラルーシを去り、現在はカリーニングラードで会社を営んでいる。ところが、シリャホヴィッチ氏本人の談によると、私の質問攻めが彼に火をつけたとのこと、昨年末に次のような E メールがロシア語で届いた。

尊敬する野町素己さん
インスピレーション、第二の波！ヤトヴィク・プロシアの発展に関して、最近数ヵ月で大変な反響がありました。
次のサイトを見てください。
http://jetvyz.narod.ru/index.html
http://rugrad.eu/communication/blogs/Prussija-Jetvyz/
尊敬をこめて
ニコライ・シェリャゴヴィチ

Wiktor Stachwiuk 著 Siva zozula より

彼はこれまでの活動を総括しつつ、活動を再開したようである。尤も、彼が言語問題に関わる活動にどれぐらい関心を持っているかは不明である。

尚、近年ポーランド側でも似たような動きがある。新たな東スラヴの文語「ポドラスカ語」の規範化と言語文化の保全を目指す団体 “Svoja” である。質問を受けてくれた J. マクシミュク氏によると、シリャホヴィッチ氏の西ポレシエ語の運動とは直接的な関連はないとのことである。彼らのサイトには正書法や文法といったテーマから広く言語文化に関わる情報が満載である。活動家の 1 人ヴィクトル・スタフビュク氏は「ポドラスカ語」で出版活動も行っている。尚、この団体は、目下のところウクライナ側とベラルーシ側の協力関係にはないとのことである。

今後この二つの団体がどのような活動を行っていくのか、興味が尽きないところである。ますますスラヴ語圏の境界から目が離せない。

熱い顔と冷めた音：ペテルブルグの音楽生活覚書

左近幸村（日本学術振興会海外特別研究員）

クラシック音楽好きの人ならば、ワレリー・ゲルギエフという指揮者のことをご存知だろう。1953 年生まれ、オセト人であり、生まれはモスクワだが、育ったのは北オセチアである。現在は、ペテルブルグのマリインスキー劇場の芸術監督兼総裁（художественный руководитель и директор）を務めている。彼はひょっとすると、プーチンとメドヴェージェフを除けば、最も世界的に名前が知られているロシアの人間かもしれない。その人気は、ネットで検索してもらえればすぐに分かるだろう。来日公演も毎年のように行われて、好評を博している。欧米での評価は詳しくは知らないが、名門ロンドン交響楽団の首席指揮者を兼務したり、グラミー賞や BBC Music Magazine Awards に彼の CD が 2 年連続でノミネートされたりしているのを見ると、それなりに評価されているようである。

2009 年の 5 月以来、ペテルブルグに来てから私は、彼の演奏を 30 回以上聞くことになった。が、ここで学術論文よろしく、私の結論を先に書かせてもらえれば、私は日本におけるゲルギエフの評価に対し異論がある。音楽はしょせん「蓼食う虫も好き好き」の世界であるから、ゲルギエフに対する評価もいろいろあってしかるべきである。私の意見もその「いろいろ」の一つにすぎない。そのことを断ったうえで、以下、ゲルギエフに対する私見を述べる。

1999 年、ゲルギエフがウィーン・フィルを振ってライブ録音されたチャイコフスキーの交響曲第 5 番の CD が出たとき、大変な熱演として日本の音楽ファンの間で話題になったことがある。私も世評につられて購入したが、確かにアンサンブルのズレをものともしない、むしろそのことが迫力を生む演奏で、初めて聞いた時、私も確かに興奮した。私の印象では、このころに、あのいかにもコーカサス的な強面の顔のせいもあるのだろうが、「ゲルギエフ＝熱血指揮者／ 21 世紀のマエストロ」という評価が、日本のクラシック音楽ファンの間で定着したように思う。アンサンブルを整理整頓することよりも、本当に生き生きした音楽を聞かせることを優先させる指揮者として、ゲルギエフは脚光を浴びたのであり、その評価は現在も基本的に変わっていない。私はそのころ学生オケに入っていたが、みんな今話題の指揮者としてゲルギエフの名前を口にしていた。ただゲルギエフの公演のチケットは高いのが常なので、日本では彼の生演奏に接することはなかった。

ところがあれから 10 年経って、実際にペテルブルグで聞いた生のゲルギエフはどうだったか。残念ながら何度彼のコンサートに通っても、10 年前に感じた興奮を味わうことができなかった。それどころか、そこにあったのは「この人は何かに熱くなることがあるのだろうか」と思うくらい冷めきった視線、インスピレーションを押し殺したような音の羅列。おまけに忙しすぎるのか、明らかにリハーサル不足の演奏を頻繁に聞かされた。最悪だったのはワーグナーの楽劇「ニーベルングの指環」という、上演に 4 日もかかる超大作を 2009 年の夏に聞きにいった時のことで、陶酔できないワーグナーがこんなに苦痛なのかと思い知らされることになった。その時初めて私は、「指環」の初演を聞いている最中に気分が悪くなって劇場から飛び出したというニーチェに共感できたのである。3 日目と 4 日目に関しては、私も途中で帰ってしまった。

ではゲルギエフが箸にも棒にもかからない、どうしようもない指揮者かというと、そうとも言えない。確かにいい時もある。これまでで一番良かったのは、2010 年の 1 月 2 日に聞いた、

左からワレリー・ゲルギエフ、ロディオン・シチェドリン、マイヤ・プリセツカヤ。2010年1月2日、マリインスキー劇場のコンサートホールにて

ロディオン・シチェドリンという、ソ連時代から活躍しているロシアの作曲家が書いた歌劇「魅せられた旅人」の演奏である。作曲者が臨席していたせいか、今まで聞いた駄演は一体何だったのかといいたくなるぐらい緊迫感にあふれた世界を描きだしていて、初めてゲルギエフが世界的な指揮者だということを認める気になった。しかも演奏直後に行われた公開トークでゲルギエフは、マリインスキー劇場の今後のプランについて1時間以上も延々と熱弁をふるって、そのエネルギーにすっかり圧倒されてしまった。もう少し一般的なレパートリーでは、ラヴェルの「ラ・ヴァルス」と「ダフニスとクロエ」第2組曲、バルトークの歌劇「青ひげ公の城」、ストラヴィンスキーのバレエ音楽「カルタ遊び」などが、心に残っている。

ここから言えることは、ゲルギエフが得意とするのは、決して熱いパッションや重厚さが求められる曲ではなく、むしろ楽譜を機械的なまでに忠実に音にしていくことが求められる、色彩的な近代管弦楽曲だということである。ラヴェルにしろストラヴィンスキーにしろ、自作が演奏家によって「解釈」されることを嫌ったことで有名だし、バルトークに至っては、楽譜に「ここからここまでは何分何秒で演奏しろ」と書いてある。

他の作曲家の作品についても、ゲルギエフの演奏で聞くと、「なるほど、この曲はこういう構造になっていたのか」「ここにこんな仕掛けが施されていたのか」と勉強になることがある。したがって私は、ゲルギエフが指揮者としてそれなりの能力を持っていることを認めるのにやぶさかではない。だから私は、（珍しい曲を取りあげたり世界的なソリストと共演したりするということも大きいとはいえ）ゲルギエフのコンサートに30回以上も通ったのである。しかし彼の長所は決して音楽を熱く盛りあげることではなく（彼の場合、それは下手だと言ってもいい）、複雑な管弦楽法を上手に整理して、洗練されたサウンドをオーケストラから引きだすことにあるということは、強調しておきたい。

何でこんなに世評と私の意見が違うのだろう？　私の耳が悪いのかもしれないが、かつてロシアでゲルギエフの演奏に接した鳥山祐介氏や安達大輔氏も私と同じ意見を持っておられるようなので、あながち私の独りよがりというわけでもなさそうだ。ひょっとしてゲルギエフは、ロシアの内と外で演奏スタイルを変えているのだろうか？そんなことを勘繰りたくなってしまう。もし、あのいかにも熱血という感じの顔のイメージが独り歩きしているとすれば、大きな問題だが。

ではペテルブルグの地元の人はというと、ゲルギエフのコンサートはよく席が埋まっているので、てっきり地元で人気があるのだと思っていた。ところが普段お世話になっているロシア人の先生から聞いた話では、ペテルブルグの人はゲルギエフが嫌いらしい。なぜかというと、ゲルギエフのオペラやバレエの演出の方針が過激だからだという。ゲルギエフのチケットを買うのは、基本的に外から来た観光客とのこと。

この話がどこまで本当かは知らないが、聞いた瞬間、私は「え!?」と思った。もちろん私もマリインスキーで何度かオペラを見ている。基本的に台本のト書に忠実な演出が多いが、

中には、衣装がずいぶんと派手だったり、たとえば中世の話を現代に移しかえるなど設定を読みかえたり、というものもある。だが現在、ザルツブルグやバイロイトなどヨーロッパに行けば、聴衆に対し問題提起を試みるより大胆な演出を見ることができる。もはや女性のヌードなど珍しくもない。そんなわけで私は、マリインスキーの演出は、センスの良し悪しはともかくとして、どれも大人しいもので、たまにはもっと過激な試みをやらないかなあと思っていたのだ。日本の宝塚歌劇を「大いなるマンネリ化の魅力」と評した先生がいるが、こちらでオペラやバレエを見ていると、ロシアの多くの人々はまさしく「大いなるマンネリ化」に魅せられているではないかと思えてくる。

さて、こちらでコンサート通いをしていて、もう一つ日本との違いで驚いたことがある。それはオーケストラのレパートリーが偏っていることである。もちろん、ロシアものがよく演奏されるのは当たり前だが、意外だったのは、19 世紀ドイツの交響曲が、あまり演奏されないことだ。

日本においては、ベートーヴェンとブラームスの交響曲で名演を聞かせられる指揮者こそ、「真の巨匠」と目される傾向がある。ある高名な日本の音楽評論家が「ベートーヴェンは偉大なのだ。それを表現できないのならば、指揮などやらないほうがよい」と述べたことがあるが、日本のクラシック音楽ファンの代表的な見解だと言えよう。晩年の朝比奈隆に見られるように、ベートーヴェン、ブラームスに加えてブルックナーの交響曲が十八番（おはこ）となれば、もはや神格化の域に達する。海外オケの来日公演でも、ベートーヴェンやブラームスの交響曲はよく演奏されるので、欧米でも事情は似たようなものかもしれない。

かつてレニングラード・フィル（当時）を率いてソ連を代表する指揮者として活躍したエフゲーニ・ムラヴィンスキーは、ドイツの交響曲も重要なレパートリーとしていたので、ロシアでもドイツの交響曲は普通に演奏されているのだと思っていた。ところが実際にペテルブルグに来てみると、19 世紀ドイツの交響曲はあまり演奏されない。中でも意外なのはブラームスの 4 曲の交響曲がほとんど演奏されないことで、マリインスキー劇場のコンサートホールとペテルブルグ・フィルハーモニーの 2 年間のプログラムを眺めてみても、2 番がマリインスキーで 1 回、フィルハーモニーで 1 回、4 番がフィルハーモニーで 2 回演奏されただけである。日本では大人気の 1 番が、一度も演奏されていない。両方のホールを合わせると、文字通り「三日にあげず」コンサートが行われているにもかかわらず。ゲルギエフの場合は、ピアノ協奏曲第 2 番とドイツ・レクイエムを 2 回ずつ振っているが、交響曲には一度も手を染めていない（確かに似合いそうにないが）。日本ではオーケストラの基本とされるレパートリーを、ロシアのオーケストラがあまり取りあげないということは、ロシアにおけるクラシック音楽の在り方を考える際、とても重要な点だと思われる。誰か考察していないだろうか？

こんなエッセイを書いていることからもお分かりのように、私はこちらに来てからさんざんコンサート通いをし、ロシア国内外の多くのアーティストに接することができた。そして多くの忘れがたい名演に接することができたが、私が得た結論は、日本のオケのレベルも決して低くないということである。もちろん、それぞれのオーケストラには得手不得手があり、持ち味がある。だがかつて札幌交響楽団の定期演奏会に通った立場から言わせてもらうと、札響の総合的なレベルはマリインスキーのオケと比べても決して劣らないどころか、むしろ上回っているのではないかとすら思えてくる。ゲルギエフをありがたがるのもいいが、札幌の人には地元のオケに誇りを持ってほしい。「本場もの」が日本のそれより上であるという保証は、決してないのだから。

学界短信

◆ 学会カレンダー ◆

2011 年 6 月 4-5 日　比較経済体制学会全国大会　於東北大学
7 月 7-8 日　新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 5 回国際シンポジウム　於北海道大学
11 月 11-14 日　スラヴ言語学国際会議「スラヴ諸語における文法化と語彙化」　於北海道大学
11 月 17-20 日　ASEEES（スラブ・東欧・ユーラシア学会）年次大会　於ワシントン DC

センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。［大須賀］

ウェブサイト情報

2010 年 10 ～ 2011 年 1 月までの 4 ヵ月間における、センターのホームページへのアクセス数（但し、gif、jpg、png 等の画像形式ファイルを除く）の統計です。［山下］

	全アクセス数（1 日平均）	うち、邦語表紙アクセス数（1 日平均）	うち、英語表紙アクセス数（1 日平均）	国内からのアクセス数（%）	国外からのアクセス数（%）	不明（%）
10 月	393,497 (12,693)	13,024 (420)	2,377 (77)	109,994 (28%)	229,370 (58%)	54,133 (14%)
11 月	776,812 (25,894)	14,539 (485)	2,037 (68)	397,439 (51.2%)	269,046 (34.6%)	110,327 (14.2%)
12 月	404,732 (13,056)	13,784 (445)	2,226 (72)	127,450 (31.5%)	219,052 (54.1%)	58,230 (14.4%)
1 月	417,084 (13,454)	13,276 (428)	2,429 (78)	119,229 (29%)	230,996 (55%)	66,859 (16%)

図書室だより

◆ 松本忠司氏旧蔵資料の受贈 ◆

松本忠司氏は、1929 年に秋田県生まれ、同和鉱業の発電所等に勤務の後、上京して早稲田大学でロシア文学を学び、1957 年に小樽商科大学に赴任。ロシア語を講じながら、ゴーリキー研究と演劇に情熱を傾けました。1968 年には教授に昇進し、1992 年に定年退職、その後、病を得て 2002 年に亡くなりました。

センターは、ご遺族より 2009 年 2 月に蔵書寄贈の話をいただき、北大蔵書と重複を避けて、図書 360 冊、雑誌 10 タイトルを寄贈いただきましたので、お知らせします。資料のほとんどは、ロシア文学に関係のロシア語文献で、ゴーリキーに関するものの他、雑誌『諸民族の友好』の付録の文学作品集を大量に含んでいます。

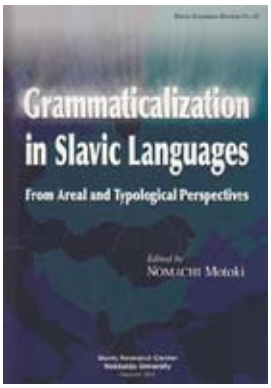
なお、雑誌は、一部を除いて、この 1 月に登録・製本を済ませましたが、図書については、今後、工藤幸雄氏旧蔵書の整理状況等を見ながら、登録・整理の時期を待つことになります。［兎内］

◆　ソ連邦共産党中央委員会総会文書の完結　◆

センターニュース 113 号（2008 年 5 月）および同 120 号（2010 年 2 月）でお知らせしていましたこのマイクロ資料の収集は、2011 年 1 月に完了しました。［兎内］

編集室だより

◆　Slavic Eurasian Studies No. 23　◆
Grammaticalization in Slavic Languages: From Areal and Typological Perspectives の刊行



SES シリーズ第 23 巻 *Grammaticalization in Slavic Languages: From Areal and Typological Perspectives* が刊行されました。今日の言語研究で盛んに議論されるテーマの一つである「文法化」という概念を主な切り口とし、言語接触および類型・比較の視点を踏まえつつ南スラヴおよび西スラヴ諸語の文法構造とその変化を分析した研究論文集です。世界の第一線で活躍する学者から、若手研究者まで幅広い寄稿がありました。掲載内容は以下の通りです。［野町］

Bernd Heine and Motoki Nomachi	Is Europe a Linguistic Area?
Alja Lipavic Oštir	Grammaticalization and Language Contact between German and Slovene
Alina Kępińska	Grammaticalisation of the Masculine and Non-masculine Personal Category in the Polish Language
Olga Mišeska Tomić	The Macedonian “Have” and “Be” Perfects
Милка Ивић	О доприносу српског префикса од- семантичком и граматичком лику глаголских лексема
Paul Wexler	Bernd Heine and Tania Kuteva, *The Changing Languages of Europe*. Oxford University Press, 2006, xvii + 356 pp. (Review Article)
Angelina Pančevska	Zuzanna Topolińska, *Polish ~ Macedonian, Grammatical Confrontation: The Development of Grammatical Categories*. Macedonian Academy of Sciences and Arts, 2008, 218 pp. (Book Review)

◆　スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 3　◆
Россия и русские глазами инославянских народов: язык, литература, культура 1 の刊行

スラブ・ユーラシア研究報告集の第 3 号は、ロシア人以外のスラヴ人が持つ「ロシアのイメージ」を、主に文学や言語学の手法で分析することを目標とした研究論文集です。予定より大幅に減りましたが、それでも 7 本の寄稿があり、ウクライナ人の持つロシア像といった大きなテーマから、ルシン文学といった少数スラヴ民族の言語文化に見られるロシアの影響を扱うものまで、テーマも研究手法も実に多彩です。掲載内容は以下の通りです。［野町］

Людмила Попович	Стереотип русского в языковой картине мира украинцев: Концептуально-когнитивный анализ
Юко Симэки	Русский язык в Украине: анализ факторов, связанных с использованием русского языка и отношением к русскому языку двуязычного населения

Иво Поспишил	Феномен Центральной Европы и русский культурный элемент в чешской среде (Несколько заметок по поводу метаморфоз чешской рецепции)
Masumi Kameda	Contemporary Arts in the Former Yugoslavia through the Russian Avant-garde: The Square of Malevich and the Poetics of OBERIU
Юлиян Тамаш	Россия и русские в русинской и малых региональных литературных традициях
Jerzy Treder	Piotr Preis, Izmail Sreznevskii, and Kashubia
Jovan Ajduković	About the First Volume of a Contactological Dictionary of Slavic Languages

◆ 『スラヴ研究』 ◆

和文のレフェリー制学術雑誌『スラヴ研究』第 58 号への投稿原稿は、現在、査読結果を踏まえた修正稿が集まっており、編集委員会で再検討をおこなっております。［長縄］

◆ *ACTA SLAVICA IAPONICA* ◆

第 29 号は今年 2 月に発行される予定です。昨年内の発行をめざしていましたが、やや編集に手間取りました。掲載論文はセンターニュース前号で発表した通りです。第 30 号への投稿は査読が終わり、採択された投稿者には査読者の意見を反映した書き直しを依頼しました。第 31 号の投稿は締め切られ、14 本の投稿が集まりました。また、第 32 号の投稿締め切りは 2011 年 7 月 15 日です。積極的な投稿をお待ちしています。［松里］

会　議（2010 年 11 月～ 2011 年 1 月）

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2010 年 12 月 3 日

議題
1. 共同研究員の選考について
2. その他

◆ センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会 ◆

2010 年 12 月 3 日

議題
1. 共同研究・共同利用公募に係わる審査について
2. その他

◆ センター協議員会 ◆

2010 年度第 3 回　11 月 30 日

議題
1. 教員の人事について
2. その他

2010 年度第 4 回　1 月 7 日

議題
1. 教員の人事について
2. その他

2010 年度第 5 回　1 月 21 日

議題
1. 教員の人事について
2. 名誉教授の推薦について
3. その他

みせらねあ

◆　人物往来　◆

ニュース 123 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。［望月／大須賀］

11 月 26 日　Cha, Jheewon（ソウル国立大、韓国）、Choi, Jinseok（同）、Dong, Youngeun（同）、Lee, Jiyeon（同）、Park, Jongso（同）、Song, Eunji（同）、Yi, Seonbok（同）

12 月3-4 日　Bruce Batten（桜美林大）、Manuel Chavez（ミシガン州立大、米国）、Anton Gosar（プリモルスカ大、スロヴェニア）、Reuel Hanks（オクラホマ州立大、米国）、Daniele Joly（ウォーリック大、英国）、Alexander Kuznetsov（IMT、イタリア）、Elisa Montiel Welti（同志社大）、David Newman（ベン・グリオン大、イスラエル）、Elaine Newman、Muzammil Quraishi（サルフォルド大、英国）、Mirza Zulfiqur Rahman（ジャワハルラル・ネルー大、インド）、Natalia Ryzhova（アムール国立大、ロシア）、Martin van de Velde（ラートボード大、オランダ）、池内恵（東京大）、大西広之（日本司法支援センター［滋賀］）、川久保文紀（中央学院大）、小泉忠之（共同通信社）、佐藤由紀（早稲田大）、島田智子（関西大）、島村一平（滋賀県立大）、田中耕司（京都大）、田村慶子（北九州大）、等々力政彦（大阪大）、西原和久（名古屋大）、八谷まち子（九州大）、三品憲一郎（防衛省）、山崎孝史（大阪市立大）

12 月 15 日　Abram Reitblat（ロシア国立芸術図書館、『新文学時評 NLO』誌）

12 月 18 日　Trey Hillman（北海道日本ハムファイターズ元監督、米国）

12 月 16 日　大山麻稀子（横浜国立大）

12 月 20 日　Jelena Nikolić（岡山大）

1 月 12 日　Peter Gatrell（マンチェスター大、英国）

1 月 19 日　岩本和久（稚内北星学園大）

1 月 20 日　梶谷懐（神戸大）

1 月 21 日　鈴木健太（東京大・院）、平野恵美子（早稲田大）

1 月 29 日　富樫耕介（東京大・院）、Mahabat Urakova（同）

◆　研究員消息　◆

長縄宣博研究員は 11 月 17 ～ 23 日の間、科学研究費研究に関する ASEEES（スラブ・東欧・ユーラシア学会）年次大会における研究成果発表及び意見交換のため、米国に出張。

野町素己研究員は 11 月 17 ～ 24 日の間、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」に関する ASEEES 年次大会における研究成果発表及び意見交換のため、米国に出張。

田畑伸一郎研究員は 11 月 17 ～ 27 日の間、新学術領域研究第 3 班「持続的経済発展の可能性」に関する ASEEES 年次大会における研究成果発表及び意見交換のため、米国に出張。

ウルフ　ディビッド研究員は 11 月 17 日～ 12 月 3 日の間、科学研究費研究に関する ASEEES 年次大会における研究成果発表及び意見交換及び資料収集のため、米国に出張。また、12 月 15 日～ 1 月 1 日の間、新学術領域研究第 1 班「国際秩序の再編」に関する国際研究会議出席及び研究打合せのため、インドに出張。

岩下明裕研究員は 11 月 29 日～ 12 月 1 日の間、新学術領域研究第 1 班「国際秩序の再編」に関する国際会議 Korea's Soft Power and East Asia にて研究報告及び研究打合せのため、韓国に出張。また、12 月 13 ～ 17 日の間、新学術領域研究第 1 班「国際秩序の再編」に関する国際会議 The Asia-Pacific Security Seminar series meeting "Russia's Relations with Asia" にて研究報告及び研究打合せのため、米国に出張。

松里公孝研究員は 12 月 25 日～ 1 月 5 日の間、科学研究費研究に関する南オセチアにおける正教復興をめぐる教会外交の調査のため、ロシアに出張。また、1 月 13 ～ 18 日の間、新学術領域研究第 2 班「エリート、ガバナンス、政治的亀裂、価値」に関わる現地調査及び資料収集のため、中国に出張。

2010 年 12 月 5 日　白老ポロトコタンへ

GCOE 冬期国際シンポジウム終了後のエクスカーションでのようす

ムックリ（アイヌの口琴）を伝承

アイヌ民族伝統のサケの保存食作り

撮り鉄は万国共通

帰途温泉に寄り、支笏湖を眺めながら一服

エッセイ	A. モリソン	マイクロフィルムで見た軍人の口髭	p. 11
	野町素己	知られざる境界のスラヴ語「西ポレシエ語」について	p. 14
	左近幸村	熱い顔と冷めた音：ペテルブルグの音楽生活覚書	p. 17

2011 年 2 月 15 日発行

編集責任　大須賀みか
編集協力　家田修
発行者　望月哲男
発行所　北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/